

日本学術会議 in 福岡

日時 令和4年2月23日(水・祝) 第1部▶12:30~13:40 第2部▶14:00~17:25

場所 オンライン

令和4年2月23日(水・祝)に、日本学術会議と九州大学の共催により、地方学術会議「日本学術会議 in 福岡」を開催しました。地方学術会議は、日本学術会議がその核としての幹事会(懇談会)を地方で開催して地方関係者と意見交換を行い、より一層強力に地方における学術振興を促進することを目的として、平成30年度より全国各地で開催しているものです。今回は、第1部:幹事会懇談会、第2部:学術講演会(一般公開)から成る2部構成としました。

【第1部】 幹事会懇談会

第1部では、初めに、日本学術会議の梶田隆章会長、九州大学の石橋達朗総長より開会のご挨拶があり、続いて、梶田会長より日本学術会議の活動状況についてご報告がありました。その後、九州大学の佐々木一成副学長よりカーボンニュートラルに関して、また同大学の馬奈木俊介教授よりデジタルトランスフォーメーションに関してお話いただき、それぞれについて意見交換を行いました。

第1部には、日本学術会議幹事会構成員、九州・沖縄地区の会員・連携会員、九州大学総長・理事、九州・沖縄地区の地元産業界より合計33名の方にご参加いただき、意見交換が行われました。

『日本学術会議の活動状況について』 日本学術会議会長 梶田 隆章



日本学術会議 梶田隆章会長

梶田会長より、日本学術会議の活動状況として、主に次の内容についてお話がありました。

- ・日本学術会議の概要
- ・「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて」(令和3年4月 日本学術会議)の主な内容と取組の進捗状況
- ・会員任命問題への対応
- ・「日本学術会議の在り方に関する政策討議取りまとめ」(令和4年1月 総合科学技術・イノベーション会議有識者議員)への対応

『脱炭素社会実現に向けた九州大学の取り組み』 九州大学副学長 佐々木 一成



佐々木一成(九大)
話題提供いただいた九州大学の佐々木一成副学長

九州にとって電力面でのカーボンニュートラルが進んでいることが強みであること、九州大学は指定国立大学法人として大学をあげて脱炭素に取り組んでいることについてご説明があったほか、国立大学協会九州支部の下に設置されている九州地区再生可能エネルギー連携委員会における最新の議論をご紹介いただきました。

『九州DX推進コンソーシアム:DX → 持続可能な発展』 九州大学教授 馬奈木 俊介



Shunsuke Managi
話題提供いただいた九州大学の馬奈木俊介教授

九州大学は、その特徴の1つである応用数学、システム情報、経済学が連携して新しい大学院プログラムを作り、数学統計を用いて社会課題を解決していく仕組みがあることについてご説明があったほか、学術的に人材を育成しながらDXを展開する場として設立された九州DX推進コンソーシアムや、デジタル技術の活用による地域課題の解決と新たな産業の創出に産学官金が連携して取り組む事例をご紹介いただきました。

【第2部】

学術講演会「若手研究者が考える地方創生と学術の未来」

第2部では、学術講演会「若手研究者が考える地方創生と学術の未来」を開催しました。

日本学術会議の梶田会長及び九州大学の石橋総長のご挨拶の後、文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課の斉藤課長、大阪大学の標葉准教授、鹿児島大学の中武准教授、宮崎大学の井上准教授、豊橋技術科学大学の小野准教授を講師に迎え、テーマに沿った講演を行っていただきました。

また、講演後には上記の講師に加えて独立行政法人国立高等専門学校機構の谷口理事長をパネリストに迎えて総合討論を行い、最後に宮崎大学の安田准教授より講演会を総括していただきました。

当日は、大学関係者の他、およそ210名の参加があり盛会裏に終了しました。

各講演のサマリーは以下のとおりです。



講演1「社会課題解決に貢献する大学への期待、政策立案の立場から」

文部科学省科学技術・学術政策局 人材政策課長 斉藤 卓也

大学を取り巻く状況が刻々と変化している中、最先端科学技術を社会実装させ、社会に役立てていくことが重要であり、特に大学には、地方の特色を生かした地方創生に貢献することが期待されています。

このため、世界と伍する研究大学や地域で特色のある大学づくりを両輪で進めるべく、社会課題解決に向けた産学官の取組を支援する共創の場形成支援プログラムなど、様々な支援を行っているところです。

地方大学には、様々な知をもつプレーヤーが集まります。それらの知を集結させるこそが大学の強みであり、大学として未来のあるべき姿を定め、そこから遡って今やるべき道筋を定めることが必要です。政府・大学・産業界・市民が一体となって活動することでイノベーションが生まれ、地方大学による地方創生に繋がると考えています。



講演2「地域におけるイノベーション政策の現状と課題

—大学と地域の関係性に注目して—

大阪大学 社会技術共創センター 准教授 標葉 隆馬

科学技術イノベーション政策において、産学官が密接につながり新たなイノベーションを生むエコシステムを形成するため、大学には地域における多様な知識の拠点となることが求められています。

しかし、九州地区においては、大学側がエコシステムを形成する上で何ができるか、自治体に明確に示せておらず、その点の改善が急務であることが分かります。

改善に向け、学術研究による社会的インパクトを評価し、可視化していくことが必要です。この点について、世界的に大きな見直しが進んでいる中、日本においては評価の対象を研究そのものから相互作用のプロセスにシフトするなど、新たな評価基準を構築する動きが進められています。



講演3「地方国立大学における産学・地域連携の「中のひと」 ～社会と大学の界面観察」

鹿児島大学 総合科学域総合研究学系 南九州・南西諸島域共創機構 産学・地域共創センター 准教授 中武 貞文

鹿児島県の特徴として、産学連携で直面する問題は研究開発型企業が多くない点です。地方国立大学は、産学連携や地域貢献の施策を取り込み、組織整備を行ってききましたが、幅転する施策の中で未だ進化の途上にあります。「中のひと」の仕事として、地域の潜在的情報(マイクロニーズ)を集め、研究テーマ、さらには産業のタネに繋げていくことが、地方国立大学の重要な仕事と考えています。多層・共創の価値創出、産業だけに留まらない地域連携も視野に入れ、これらマイクロニーズを集める工夫を少人数制産学マッチングイベント「かごしまTechミーティング」等で展開しています。産業界等との招り合わせ人材育成がさらに必要であると考えます。



講演4「地域文化アイデンティティの再構築と実践 ～誇りと尊厳ある生き方(Well-being)を取り戻すために～」

宮崎大学 地域資源創成学部 准教授 井上 果子

戦後、経済成長と停滞の時期を経て世代間や地域間の認識、脱却したい貧しさの感覚にズレが生じています。

地方では「経済拡大の論理」よりむしろ「地域の論理」の適用が求められます。地域に存在する多様で豊かな地域資本を糧に、人々がサステナブルに誇りと尊厳をもってよりよく生き、その結果、さらに地域資本が蓄積されます。そのようなプロセスが各地域で積み重なり地域文化アイデンティティが再構築されます。それこそが地方創生です。

地方では、今までになかったコンビネーションによって生まれた同化型、折衷型、革新型の創造性が革新的価値を創造する実践が展開しています。

地方創生と学術の未来に向け、本来の力を発揮する条件が整っているか、「結果」より「前提条件」への注目が必要です。



講演5「若手研究者が地域に出ていくために～意義・葛藤・評価から考える～」

豊橋技術科学大学 工学研究科 建築・都市システム学系 准教授 小野 悠 (日本学術会議若手アカデミー地域活性化に向けた社会連携分科会からの報告を含めて)

第25期若手アカデミーでは、科学と地域社会の持続的な関係性を再定義し、その実現方策を検討するために、地域活性化に向けた社会連携分科会を設置しました。

若手研究者と地域との関わりは分野や個人によって様々です。地域とともに科学を営む若手研究者にとっては、研究に直結しない活動もあり、やりがいを感じながらもしんどさを感じてしまう実態があります。

任期のある若手研究者の、評価をめぐる認識と理想像に乖離があるのではないのでしょうか。

若手研究者が地域に出ていくために、科学の営みの多様な社会的価値を評価し、「社会の公共的な役割を大学が担える仕組み」＝「地域での活動が大学のミッションの実質的な一部になることが地域としても大学としてもプラスになるような仕組み」を大学と社会の双方で考えることが必要ではないのでしょうか。



総合討論・パネルディスカッション

パネリスト： 独立行政法人国立高等専門学校機構理事長 谷口 功

文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課長 齊藤 卓也

大阪大学社会技術共創センター准教授 標葉 隆馬

鹿児島大学総合科学域総合研究学系南九州・南西諸島域共創機構産学・地域共創センター 准教授 中武 貞文

宮崎大学地域資源創成学部准教授 井上 果子

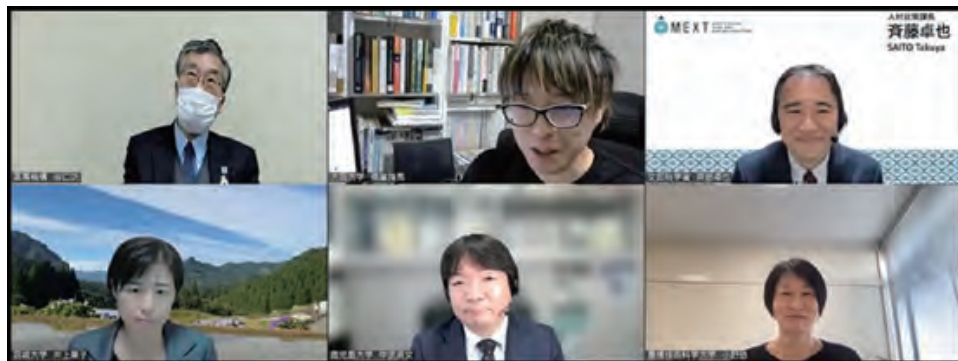
豊橋技術科学大学 工学研究科建築・都市システム学系准教授 小野 悠



パネリストとしてご参加いただいた谷口理事長

最初に谷口理事長より、高専の視点から若者が活躍する社会へ向けてお話いただきました。

その後、標葉准教授にコーディネーターを務めていただき、各講演を踏まえ、一般参加者からの質問なども含めて、討論が行われました。若手研究者が地域社会に貢献しようとしている事例や成功事例について、具体的なお話があったほか、アカデミアにおける研究者の評価のあり方等について、様々な立場から活発な討論が行われました。

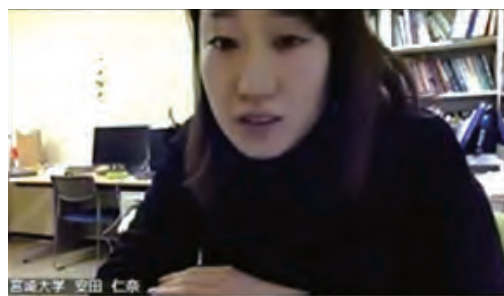


パネルディスカッションの様子

シンポジウム総括

宮崎大学 農学部 准教授 安田 仁奈

安田准教授より全体の総括をいただきました。



学術講演会の感想(アンケート調査から抜粋)

何人かの講演者が指摘していたように地方と学術の関係性が変化の時期を迎えており、そういう意味で大変学びが多いイベントでした。

若手研究者がどのように地方創生に取り組んでいるか、そこでの課題が何か理解できて大変有益な学術講演会でした。

非常に興味深く拝聴しました。今後さらに掘り下げて政策や評価指標などに具体的に反映される活動になっていくことを期待します。